慈愛の種をロータリーの「内向きの奉仕」にも播こう！

ー自ら修養を積み家庭を大切に

国際ロータリー２５１０地区
パストガバナー
小林 博
（札幌北 RC）

ロータリーは１００年以上の歴史をもち、世界に凡そ１２０万人の会員を擁する巨大な組織。ですからその運営とか方向づけなどは大変難しいものがあると思います。

ロータリーの定義

ロータリーは、人道的な奉仕を行い、あらゆる職業において高度の道徳的水準を守ることを奨励し、かつ世界における親睦と平和の確立に寄与することを目指した、事業及び専門職務に携わる指導者が世界的に結び合った団体である。

上の「定義」に書かれているように、ロータリーの狙いはいくつかありますが、その中心的な狙いは他人に対する人道的な奉仕（「奉仕」の言葉は英語で service、ロータリーの慣用語）で、これがロータリーの基本理念でもあります。

ただ、時代は大きく変わってきました。ロータリーは「いまのままでいいのか？」と少し気にもなってくるのです。

そこで私が申し上げたいことは、ロータリーの奉仕は他人に対する「外向きの奉仕」だけでなく、ロータリアン自身、あるいはその身辺に対する「内向きの奉仕」もあってもいいのでないか。このことは「人間性豊かな人づくりに役立つことになる」ということです。

一体、どういうことを言わんとするのか、その真意に関して２、３の話題からご説明致します。

ロータリーの本質は〝慈愛〟

ビチャイ・ラタクル会長
（ロータリーの友 HP から）

慈愛とは？ある年輩のロータリアンが私に「今まで一番感動した会長テーマはいまから２０年前（２００２～２００３年＝筆者のガバナー年度）の国際ロータリー会長ビチャイ・ラタクルさんのいわれた『慈愛の種を播こう Sow the seeds of love』であった」といわれるのです。

ラタクルさんはタイ国の副総理も務めたことのある人格者。「慈愛の種を播こう」というような「愛」を単独のテーマとして提示した国際ロータリー初の会長で、私達ロータリアンに新鮮、かつ強力なインパクトを与えて下さいました。

「慈愛」とか「愛」とは簡単にいえばすべての人に対する思いやりの心、とくに苦しみ悩みをもつ人に対する「やさしいいたわりの心」のことです。

尊敬する別の先輩ロータリアンは「『いたわりの心』『やさしい心』こそがロータリーの真髄ではないか」と述懐しておられたことを思い出します。私は全く同感です。「慈愛」というのはロータリーの本質を示す言葉、あるいは原点といってもよいのでないでしょうか。

話は変わりますが、私は札幌北ロータリークラブの例会で、「健康」「お金」「愛」の３つのうち、どれか１つだけしか取ることが出来ない極限の状況を考えたとき、「あなたはどれを取りますか？」という非常に難しい質問に対する回答をみなさんで考えていただいたことがありました。応答の詳細は省略せざるを得ませんが、こうしたことは架空の話ではなく実際に起こり得ることなのです。

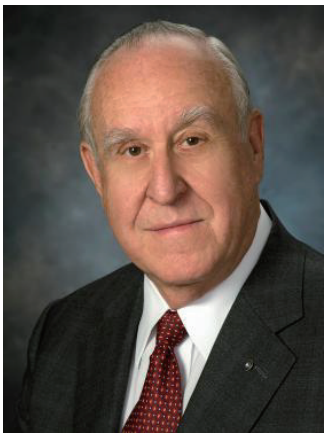
播こう
慈愛の種

「健康」も「お金」も絶対になくてはならない文句なく大事なものです。しかしいろんなステージのがんを病むような人達からの回答には考えさせられました。そういう人達の多くの回答はもはや健康ではありませんし、またお金でもありません。ただ１つ、やさしい「愛」の心だったのでした。

愛のこころなんて私達は普段あまり気にしていません。忘れているといってもいいでしょう。人間が追い詰められて初めて気付くことかも知れません。つまり愛の心が実は人間にとってもっとも本質的なもの、もっとも大事なものであることを教わるのです。

２０１６～２０１７年のＲＩ会長はジョン・ジャームというアメリカの方。会長テーマは「人類に奉仕するロータリー」Rotary Serving Humanity。

Humanity の日本語訳は「人類」となっています。辞書によればヒューマニティは人間性、人間愛、慈愛・慈悲の心とか人類などいろいろ広い意味合いのものですので「人類」と訳



ジョン・F・ジャーム会長
（ロータリーの友 HP から）

して間違いではないのですが、私としては「ヒューマニティに奉仕するロータリー」と無理に和訳することなくそのままにしていただきたかったと思います。

いずれにしても国際ロータリーの会長テーマが発表されるようになった１９５３年以来、少なくとも２人の会長が「慈愛＝Love」とか「ヒューマニティ＝Humanity」と、いずれも人間の心のあり方そのものの大切さを訴えたことになります。こんなことは近年のロータリーでは恐らく初めてのこと。恐らくロータリーの新しい動きの芽生えではないでしょうか。

1. 感謝のこころ

「内向きの奉仕」（耳慣れない言葉ですが）の第一歩はロータリアン自身が、感謝すべきことにどれだけ「ありがとう」の言葉をはっきりいっているか、ということから始まります。

筆者の身近に、札幌の地下鉄の乗り降りに不便をされる車いすの身障者の方がおられます。そういう人達には予め連絡を受けた駅員がドアとホームをつなぐ大きな板をもって待っていて、乗り降りに支障がないようにお手伝いをしてくれるのです。ところがそのとき車いすの人達から「ありがとう」という言葉を聞いたことがまずありません。

同じような感謝の言葉の欠如の例は他にもいろいろあります。最近、自動車業界世界トップの「トヨタ」の豊田章男社長が退任にあたって、同氏の率直な心情が全国紙に大きく紹介されていました（朝日新聞、２０２３・３・３１）。「日本を愛し経営してきましたが、ときに心が折れてしまいそうになります。なぜなら、ここ日本では、私たちに対して『ありがとう』の言葉が聞こえてくることはほとんどありません。ところが海外では自動車産業がその地域の成長に貢献していることに、ものすごく感謝されます。これからも頼みますといわれれば、本当に嬉しくなります。しかし日本ではこうした思いをしたことはありません」。いずれもなぜ、日本では感謝の言葉が少ないのでしょうか？

恐らく多くの日本人は押しなべて「ありがとう」の言葉をはっきり言う習慣とか習性がないからではないのでしょうか。ロータリアン自身はどうなのか？　感謝の「ありがとう」の言葉をどれだけ言っているか、つい忘れていることはないのか、心配になるのです。

考えてみました。私達は生まれてきたこと自体が全くの超奇跡で、いまこの世に生を受け、親をはじめ社会のあらゆるみなさんのお世話になって人生１００年時代のひと時を生かしていただいています。これは特別に与えられた「天運」なのです。この天運（あるいは天命といってもよい）に対する心からの感謝、「ありがとう」が当然なければなりません。

日常生活においても、直接お世話になった人に対しては勿論ですが、間接的にお世話になった人に対しても、心からの感謝の「ありがとう」の言葉がいつも自然に出てきて当然なことと思います。「心のなかで思っているからいいではないか」ではいけません。自らの感謝の気持ちが身の周りに伝わるように、はっきり表現できるようになったらいいと思います。

「ありがとう」の言葉は、単に感謝の意味だけではありません。感謝の気持ちはひとりの人間の「愛」とか「ヒューマニティ」の心から生まれるものです。ですから「ありがとう」という言葉がいつも自然に出てくるような人は「慈愛」のこころに満ちた人、あるいは「人間性」の豊かな人なのです。こういう人こそが真のロータリアンであると思うのです。

ですから「感謝」のありがとうの言葉を口によくすることはロータリアン自身にとっての「内向きの奉仕」の第一歩と思います。

2. 家庭へのこころ

いままでのロータリーの奉仕活動の対象は主に他人に対する「外向きのもの」でした。

ロータリーでいう奉仕は「クラブ奉仕」のほかに「職業奉仕」「社会奉仕」「国際奉仕」「青少年奉仕」の５大奉仕がありますが、いずれも外向きのものでした。

ところが、「内向きの奉仕」、例えばロータリアン自身のもっとも身近な家庭、家族に対する奉仕というものはありません。なぜでしょうか？　照れくさい、あるいは遠慮している？

「家庭を省みないで何のためのロータリーなのですか？」という家内からの厳しい言葉を何度か耳にしたことがありました。外向きの奉仕を考えるばかりに、身内への奉仕をつい疎かにしていたのかも知れません。

他人への無我の気持ちでの熱烈な奉仕は「超我の奉仕」ともいってロータリーではもっとも理想的なものとされます。しかし、これにはかなりの無理があって、誰しも出来ることではありません。

他人へのどんな奉仕よりも、まずは各自の家庭への思いやりを考えるべきではないでしょうか。自分の家庭に十分尽くすと同時に他人への奉仕を、と考えるのが多くの人の自然の心情ではないかと思うのです。

つまり、「家庭への思いやり＝慈愛」こそが本来、すべてのロータリー活動の「出発点」といってもいいのではないでしょうか。ロータリーの奉仕はそれからであってもよいと思

ROTARY BEGINS AT HOME
ロータリーは家庭から

ガイ・カンディカー会長
（ロータリーの友 HP から）

うのです。

国際ロータリー第１４代会長を務められたガイ・ガンディカーさんは１９１６年にA Talking Knowledge of Rotary（「ロータリー通解」小堀憲助訳）という本を出版されています。このなかに「ロータリアン最良の活動の場は「家」（家庭のこと）である。人は良きロータリアンたるがためには、家族に恵まれている場合にはその妻と子供達に真心を尽くさなければならない（以下略）」といっておられます。ご両親に対する真心はいうまでもないことでありましょう。

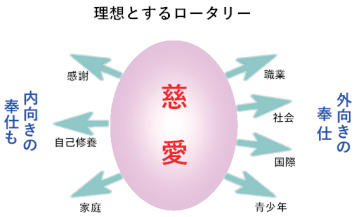
「ロータリアンの愛の心を家庭だけでなく業界にも拡げるのがよい」ともガイ・ガンディカーさんは言っておられます。家庭から始まる愛のこころの大切さを、100 年以上前にすでに指摘されていたことに対し、改めて畏敬の念を禁じ得ないのです。

ちなみに、ガイ・ガンディカーさんは１９２３年９月１日の関東大震災のときに、支援金２５,０００ドル（いまの日本円で凡そ４０億円に相当か？）を送って下さった方でもあります。

「内向き」と「外向き」の奉仕の一体化

いままでのロータリーの奉仕活動は主に他人に対する「外向きのもの」でした。今回、述べた「感謝」「家庭」はそれぞれロータリアン自身、あるいはその身辺（とくに家庭）に対するいずれも「内向きのもの」でした。

「内向きの奉仕」は従来の「外向きの奉仕」とどんな関係になるでしょうか？お互い全く相容れないものでしょうか？イヤ、そうではないと思います。むしろ「内向きの奉仕」は「外向きの奉仕」の少なくとも支え役というか、土台役になればいいのだと思います。



「慈愛」のこころは外に向かってだけでなく、内に向かっても大切なことです

あるいは「外向き」と「内向き」との２つが互いに補い合い一体化していけばよいのだと思います。いずれにしてもお互いが協力し合っていけば結果的に極めて望ましいロータリーを創っていくことが出来るのでないでしょうか。

ロータリーの「内向きの奉仕」なるものは「感謝」「家庭」の２つだけではありません。今回述べることは出来ませんでしたが、他にも、たとえば「正義とは何か」を始め、「勇気」・「礼節」・「誠実」・「矜持」・「寛容」など大切なことがたくさんあります。要は感謝の言葉を忘れることなく、自己修養（品性とか徳性を磨き人格を高める努力）を積むこと、そして同時に家庭を大切にしましょうということです。

一言補足。ロータリーは「奉仕と親睦」の団体とよくいわれます。そのとおりのことで間違いはありません。ただ、私はロータリーは「奉仕と友愛」の団体といったほうがいいのではないか、と思っています。「友愛」の言葉には「親睦」だけでなく、「慈愛」のこころがはっきり示されているからです。

上に述べたことを努めることで、少しでもロータリーがより多くの人を惹きつけ、真に魅力あるものとして益々発展していくことを祈るばかりです。

筆者ロータリー歴
１９２７年（昭和２年）、札幌生まれ。札幌北ロータリークラブに入会（１９７１年５月）。同クラブ会長（１９９４～１９９５年）、ロータリーの「ＧＳＥ」プログラムのチームリーダーとして５６９０地区（米国のカンザス・オクラホマ州）に４週間滞在（１９９７年）。２５１０地区ガバナー（２００２～２００３年）。職業分類は医学（がん）研究。現在、内閣府所管公益財団法人札幌がんセミナー相談役。